

第三者

ヘンリー・ジェイムズ
出原博明訳

I

二三年前に、それまでは、親しくもなかったし、ほんの微かに知り合っていたという程度を出なかった、二人の善良な女性が、マーという、小さいが古い町で一緒に暮らすことになったのだが、それは、当然のことながら、それなりの熟考の末のことであった。ふたりは、姓が同じで、はとこ同士であった。が、ふたりの人生の航路は、これまでに交差することはなかった。ふたりをたぐり寄せることになりそうな年齢上の一致ということもなかった。年上のフラッシュ嬢は、人生の多くを海外で過ごしてきた。彼女は、物腰の柔らかな、内気な人物で、スケッチ画家である。運命は、彼女に、スイスとイタリアの一樣な下宿^{バンシヨ}ン——それらは、多様と見えて、やりきれないほどに一樣であった——で暮らすことを強制したのだった。それらのどのバンシヨンに住んでみても、紐をしっかりと締めた帽子、長手袋、丈夫なブーツ、携帯用の折畳み椅子、スケッチ・ブック、タウフニッツ判の小説、こういうものを伴侶とした彼女の姿は、イギリスのオールドミスというものについての博物学誌向きの口絵、としてこの上なくぴったりと極まっていた。この可哀相なフラッシュ嬢という女性は、独立した個人としての尊厳をもっているとは考えられにくいタイプのとても適切な実例、という印象を与えたことだっただろう。ところが、これこそは、彼女が身近な人たちに対して行使して楽しんでいたものだ——彼女の正体はなかなか依怙地な性質なのだ。そして、かつてはそれには可愛ささえ感じさせるところもあったのだが、今では、青白く

て骨張り、おずおずとして、ひどく風変わりで、口にすることといえば意味のはっきりしない間投詞ばかりだし、顔といえば眼鏡と歯ばかりが目立っているという有様だったので、その正体が世間にひろく認識されても不都合はなかったし、それを嘆かれて控え目にするということもないようだった。はとこのエイミー嬢の方は、十歳若かったが、彼女とは異なる姿をしていた——十分に奇妙なことだが、殆ど全面的にイギリスの空気の中で育成されたのにも拘わらず、この女性には、前者よりも遙かに外国の影響が現われているように見えたかもしれない——小麦色で、きびきびとしており、表情豊かだ。文字どおりに若かった頃には、目立ちたがり屋、といわれさえした。彼女は、足というものに無邪気な虚栄心を抱いており、足は、彼女が自分の機知を、または少なくとも良い趣味を、証明するひとつの器官であった。仮に、その足が可愛くない場合であっても、靴で飾ってやれるだろう、と考えた。つまり、決して、——そうだ、決してスーズンのように、——それに見切りをつけてしまうという事はしなかつただろう。彼女のきらきらと輝く褐色の目は、いくぶん挑戦的であり、はとこを、はっきりと、身なりのダサイ女だと見なしていたのだった。彼女のことを、鷺鳥のごときとんまとさえ考え、それを、心の中で遺憾におもっていた。とはいうものの、自分自身も、やはり、小羊のごとくにおとなしかった。

おどろくほどに古風な貴婦人だった老いた伯母の遺言のおかげで、この無害なふたりは、利益を手に入れた。主に他の人たちの仕業によって、晩年の伯母には殆ど会えないようにされていたのだが。だから、彼女たちが手に入れることになった、ちょっとした財産は、将に幸運なたなぼたという感じてあった。ふたりは、少なくとも互いの間では、こんなことは夢想だにしなかつた、という様子をした——実際、今は亡き伯母の＜忌々しい^{オーソラージ}取り巻き＞連中の始末におえない性格は、こんなことを夢想するように彼女たちを勇気づけるところが乏しかったのだから。彼女たちは、フラッシュ夫人が身内の者たちから、脅迫されたり騙されたりしているとおもっていたのであり、殆ど啓示によるとおもわせるようなこんな公正な行為を彼女に期待することは、で

第三者

きそうになかったのである。フラッシュ夫人の夫の姪たちにとっての幸運は、夫人が、彼女たちの不幸を願っていた連中の大方よりも長生きしたので、いよいよ最期を迎えたときに、それが立派なフラッシュ家の財産のフラッシュ家らしい立派な使い方からはずれているとって非難されることがなくなっていたということであった。完全に自分自身のものである財産を、この伯母は、好きなように処分してしまっていた。が、彼女は、故国を離れて暮らしている可哀相なスーザンを憫れみ、夫をもたないままにいる可哀相なエイミーのことを忘れずにいたのだ。尤も、彼女は、最後の条項の中で、二人を、いささか雑だといってもいいほどに十肥ひとからげという風にしていたのだが。遺言執行者にとってそれよりも都合のよい解決法がないのであれば、マーの旧邸は、ふたりの共通の利益のために売却するように、と彼女の遺言状は指示していたのである。だが、結局はどういうことになったかといえば、二人の遺産受取人は、当然の順序にしたがって助言を受けて、はやばやと、——まったくの同時に、というのではなく——現場で自分の将来の見通しをたてるために、やって来たのだ。彼女たちは、それぞれの都合でマーに到着し、それぞれ、マーがとても気に入ったので、ここにとどまったのである。ふたりが互いに出会ったのは、こんな風にしてであった。つまり、エイミー嬢は、町の事務弁護士の使いの少年を伴って屋敷の玄関に姿を現わし、中へ入る許可を管理人に求めるつもりだった。が、扉が開いて目にとびこんできたのは、管理人ではなくて、予想もしていなかったひとりの女性で、先方も不意をつかれたという様子だった。ひどく古びたレインコートを着ていた。長い柄のついた単眼鏡を手にしてしたが、子供がガラガラをもっているのとそっくりであった。こうしてスーザン嬢は、既に現場へ出陣してきていて、管理人が所用で出かけている留守のあいだに、屋敷の中を歩きまわり、詮索したり、深く考えをめぐらせたりしていたのであるが、まるでそれがもう自分のものになっているといわんばかりの態度で姿を現わしたのである。ついに自分も中に入り、エイミー嬢もまた、スーザン嬢と同様に、そこから再び出てくる気はなくなったのだった。

もしもフラッシュ夫人が、彼女が遺す屋根の下でふたりが一緒に仲良く暮らすということを自分の好意を受ける条件にしていたら、どういうことになっていたのだろうか、などと想像してみるのには、われわれの分を越えることになるだろう。しかし、そこに立ったとき、ふたりが同時に同じ考えを自発的に抱いたということは確かであった。ふたりは、その場で、この魅力ある古い屋敷こそ将に互いに欲しがっていたものだ、ということに気づいたのだ。静かな避難場所と保証された将来を願う彼女たちの気持ちに、この屋敷は完璧に答えてくれたのである。こんな訳で、屋敷は売却されなかった。そのまま、ふたりの所有に帰した訳だが、故人のものであった極めて〈上等の〉古い付属品も、不用意にいじられたり分割されたりすることがなかったばかりでなく、敬意をこめて修復されて限りない賞賛を受けた。他方、遺言執行の代理人たちは、これで仕事が非常に簡単になったのを喜んだ。彼らは、——彼らの妻たちが、というべきか——ひそかに疑念を抱いたのかもしれない。つまり、この血迷った判断をした相棒同士が熾烈な喧嘩をして、あらゆる泥仕合のかぎりをつくした果てに、この共同生活を崩壊させるだろう、という冷笑的な予測である。ただ、このような預言者達は通俗的な観点に立っていたようだ、ということには言うておかなければならない。ところが、ふたりのフラッシュ嬢は、通俗的ではなかった。彼女たちは、独身であることという酒を厭というほど飲んできており、それが耐えがたく苦しいものだ、ということが判っていた。孤独と悲哀というものを知らないわけではなくて、十分に謙虚な気持ちで、この上ない好機に感謝したのである。それに、三月も経たないうちに、互いに、相手の最悪のところさえ知った。エイミー嬢のほうは、夕食前にちょっとした夕べの睡眠をとったが、その時間には、——とても奇妙なことだが——スーザンのほうは決して眠ることができなかった。スーザン嬢のほうは、食後にうたた寝をする。だが、将にそのときこそ、エイミー嬢は最もおしゃべりをしたいとおもうのであった。自分は姿勢を真直ぐにしている何かで支えるということをしていないスーザン嬢は、エイミー嬢の、座っているといえる姿勢をとるときには殆ど如何なる場合でも、腰のくびれ

第三者

たところに三箇のソファ・クッションのうちの二箇までを工夫して押し当てるというやり方に、反感を抱いた——そこは、明らかに狭すぎてクッションを二箇も押し当てるべきところとはいいかねる。

しかし、ここまで言ってしまうえば、それで、いうことはすべてであった。そして、ふたりは、それぞれが、掘り返すべき自分自身の土壌、いろいろな過去の残骸の埋められている自分自身の掘り返すべき土壌を、楽しい気持ちで意識しつづけた。ふたりは、それまでの互いの人生がとてつもなく相異なるものであったという考えを抱いた。どちらも己の生き方をあまりにも強情に押し進めてきたので、相手の耳にはもの珍しく聞こえるような逸話の領域を互いに持つようになっていたようだ、とおもい合った。スーザン嬢のほうは、外国の^{バンション}下宿暮らしをして、ロシア人、ポーランド人、デンマーク人、それに、彼女によれば、彼女をととても大切にしてくれて、しばしば文通をつづけることにもなった、この上なく風変わりな沢山のアメリカ人はもとより、ときには、イギリス人の華ともいえる貴族とさえ出会っていた。他方、エイミー嬢のほうは、結局は並の航路からもっと大きくはずれていて、ロンドンで長年生活した結果、文学・芸術の世界ばかりか、更に、——スーザン嬢は息をつめて聞いた——演劇界の思い出さえ豊かであった。そういう世界との交わりの影響で、彼女は——ほら、このとおりだ！——一篇の長編小説を書いて匿名で出版していたし、また、一篇の戯曲を書いてそれは印象あざやかにタイプ・コピーされていた。エイミー嬢は、マーの絵のように美しい景色の少なからぬ魅力は、〈社交界全般〉を勇敢に犠牲にして〈真の仕事〉へ戻ってくるための支えとなってくれるだろう、という思いを漏らした。彼女の頭の中には数え切れないほどの構想が詰まっておき——それゆえに、スーザン嬢にとっても、未来がそれらの構想で満たされるもののおもえた。彼女のほうはといえば、再びスケッチにとりかかるために、風がおさまるのを待っているだけであった。マーの風は、しばしば激しかったが、それは、南海岸の、赤屋根の建物のたて込んだ、歴史ある、このような小さな古い町では、当然のことであった。この町が、かつては、ある意味では英仏海峡の女

王のごとき存在であったということを、はとこ同士で互いに話題にし合った。町は今は丘の頂上にとり残されたようになっているが、海は、その機嫌の影響を絶えず町に及ぼすことがなくなるほどの遠くまでは、まだ退いてはいなかったのである。スーザン嬢は、イギリスの風景の中へ戻ってくると、深い愛情がふつふつと湧いてきて、かすかなため息をついた。アルプスとアペニン山脈をおもい出すときも、結局、故国を愛する気持ちから、そのため息が更におおきくなるのだった。彼女は、絵の主題を選び出していたのだが、頭を傾げてすわり、海の向こうの風景はもっと描きやすかったのに、というおもいを抱き、水彩の絵筆をなめながら、神経質に、——いささか調和のない様子で——待ったり、ためらったりしていた。どういうことになっていたかといえば、彼女たちは、それぞれ自分で故国を再発見していたのだった。ブルームズベリーの貸間から出てきたエイミー嬢は、それを、桜草と夕映えとして語り、アルノ川とロイス河畔からたち戻ってきたスーザン嬢のほうは、いろいろな複雑な気持ちのこもったひかえめな誇りをもって、正にこれがイギリスだわ、と言った。

その故国は、小さな緑地の飾り帯と青い海の大きな帯の中ばかりではなくて、やはり、屋敷の中にも彼女たちと共に在った。それは、彼女たちが一緒に手をふれてみたり不思議の念を抱いたりしたもろもろの遺物の中に在った。彼女たちは、それらの中に、何かをととても重要であると推理したり、ロマンスを呼び起こしたりするための、手がかりを見つけだしたりして、非常に小さな隙間に大げさな物語のかずかずを詰め込み、また、過ぎ去った時間の奥へ向かって錆びた音を鳴らしてくれるかもしれない色あせた鈴の紐は、ひとつ残らず引っ張ってみるのだった。いずれにせよ、此処で、彼女たちは自分たちに共通の先祖と向き合っていた。先祖については、これまでにはなかったほどに、そのすべてが、一流であって当然、と考えた。ついでにいえば、その一流のもの——小さくても悲しげで、二流で、全盛期を過ぎている、マーという町の最上のもの——は、この立派な古い屋敷の堅い椅子のひとつひとつに座っていないであろうか、奇妙な古びた掛け布団のひとつひとつの

第三者

継ぎ接ぎの中に縫い込まれていないであろうか。その二百年の歳月が、焦げ茶色の鏡板張りの応接間の中に存在しており、幅広い階段の上で根気よくきしみ音をたて、赤煉瓦で囲まれた庭で草となって花を咲かせていた。マーで誰かが為したり参加したりしたことがあるもので、フラッシュ家の者が関わりをもたなかったものは何もなかった。それでも猶、彼女たちは、もっと多くのイメージをほしがり、空想にふけることができるように工夫しておしゃべりをし合った。そして、そこには、肖像画があった——そのうちの半ダースは比較的最近（千八百年を彼女たちはこういつている）のものであり、ピッティ画廊でチチアーノの絵を模写したことがある末裔にとっては、いささか厄介なものであった。だが、彼女たちは、細部に好奇心をもったのであり、過去へ延びている空間をもう少し多くの人々で賑やかにして、それを、かざかざの人の姿を浮き彫りにした衝立として、自分たちの椅子の背後に立てたいとおもったのであろう。彼女たちは、いろんな空論やちっぽけな想像は振り捨てて、学術的な調査研究にたずさわっていると考えかけたほどである。そして、これらのこと全てが、盛儀に寄与するのだ、と。彼女たちの望みは、何かを発見することであった。スーザン嬢は、自分よりも大胆な相棒の羽ばたき方のおかげで勇気を得て、何か悪いことを発見することをも恐れなくなっていた。それを発見することこそ、彼女たちの調査研究が結局は行き着くところなのかも知れない、と最初に警告したのはエイミー嬢に他ならなかった。更に、何か非常に悪い事がかつてマーで起きていた場合、もしフラッシュ家の者がそれに連座していなかったとしたら自分たちは残念におもうだろう、という信条をかかげたのもエイミー嬢に他ならなかった。その瞬間こそ、スーザン嬢の精神は緊張の極みに達した。彼女は、奇妙な、かすれた笑い声をたて、驚いたかのような、また驚かせようとするかのような、なかなかとまらない喘ぎをみせて、もしそんなことがあったならば自分はとても恥におもうだろう、と宣言した。そして、ふたりは、暫くの間、黙ってじっとしていた。ただ、犯罪についてどの程度まで許容する覚悟ができていくかについては、はっきりとは口にしなかった——その問題にふれもしなかった。しかし、観

察者には疑う余地がないほど明らかなのだが、それぞれが、相手は殺人罪を限界外の許せないものとして一線を引くつもりがないばかりか、許容の限度を更に——そう、色事詐欺、にまで広げるつもりだろう、と互いに想像していたのである。仮に、スーザン嬢が、ドン・ファンは一度でもこの港に寄港したことがあったのかしら、と尋いたとしたら、エイミー嬢のほうは、きっと、答のかわりに、ドン・ファンが立ち寄らなかった港なんていったいあるのかしら、知りたいものだわ、と言ったことであろう。ただ、残念なことに、屋敷の中の紳士たちの肖像画は、ひとつとして、彼にいささかも似ていなかったし、淑女たちのそれも、ひとつとして、彼の犠牲者のひとりとはおもえなかった、ということは事実である。

はとこ達は、それでも、結局、新発見物を得た。主に文書類から成る、古いがらくたの入った箱を、おもいがけず発見したのだ。それらは、一部は、歳月を経て黄灰色になった、新聞やパンフレット類の印刷物であり、あとは、書簡——判読もおぼつかないほどに色あせているが、明らかに保存のために仕分けされ、遙か昔に流行した小枝模様のリボンでくくられて幾つかの小さな束にされている書簡、であった。マーの地下の基盤は堅固で——股をひろげて座っているかのような大きな地下室によってがっちりとゆるぎないものにかためられていたが、それらは頑丈で、穹稜の形をした聖堂地下室に似ており、また、それは、当今の貧弱な考えでは、活気に溢れて騒々しかった昔の時代の逞しい商人や銀行家たちの宝蔵として目に映った。断固たる調査をした結果、とある部厚な壁の窪みから——その調査をしたのは、はんぱ仕事に雇われている土地の青年であり、たまたま、自分自身の興味からも、この方面のことを調査していたのだが——あり余るほどの古びたがらくたが出てきて、それにまじっていた問題の小箱も明るみの中へ引き出されたのである。いうまでもなく、それには、はっと印象づけるところがあり、ひとつの発見、という感じだった。尤も、発見物といっても、無理にこじ開けてみると、せいぜい、或る分量の、判読しがたい手紙類に過ぎなくて、子供騙しのようなものであったのだが。当然のことながら、この善良な女性たちは、その瞬間、

第三者

古いギニー金貨——守銭奴の秘蔵物，が入っているのではないかという希望を抱いて心をと乱した。更に，そのときの彼女たちの希望は，多分，ダカット金貨やダブルーン金貨や旧ペソ銀貨などという，昔の冒険物語の外国コインが帽子一杯ほど，というものでさえあったであろう。こういうものは，海を渡ってきて昔の港に隠されていたのが，ときどき発見されたりしていたのだから。しかし，彼女たちは失望を受け入れなければならないことになって——その手紙類を最大限に活かすことによって，言い替えれば，それらを素晴らしいものと見なすことに同意することによって，それを受け入れた。たしかに，それらは，疑いもなく素晴らしいものであった。とはいっても，ざっと吟味したところでは，むしろ，難儀な迷宮のようなものであるということとは解消してくれない。いずれにせよ，色あせたりボンでくくられた小さな束は，こんなことの経験に乏しいスーザン嬢の目には不可解なものであったのだが，数夜にわたって，暖炉の火の傍らで，彼女が心地よいたた寝をむさぼっている間，エイミー嬢がそれと取り組んでいた。けれども，スーザン嬢が，或るとき，九時ちかくに目を覚ましてみると，彼女は，ぐっすりと眠りこんでいたのだった。それからのことの成りゆきは，このゴシック体の文字が判らないとこぼしていささか苛立ち，パッテン氏に頼んでみようという考えを抱くようになった。パッテン氏は教区牧師であり，牧師としてマーの古い時代の年代記に興味をもっているということが知られていたのである。これに加えて——そして，彼が，刻下の仕事への分別をこの研究の為に犠牲にすることがときどきある，ということに加えて——彼は，気質が独特で，血色がよく，眉毛がふさふさとしており，黒い広縁の中折れ帽子を愛相よく斜めにかむった，紳士であった。「この書類の内容に何かあったら，」と，エイミー・フラッシュ嬢は言った。「あの方は，おしえてくれるわ」

「でも，もしも，それが」とスーザン嬢が提言した。「あたし達が望まないような内容の何かだったら？」

「あら，それこそ，あたしが考えていたことだわ」と，エイミー嬢が，彼女らしく即妙にいい返した。「もしも，それが，あたし達が知るべきでない何

かであったら——」

「あの方に、ただ、それをおしえないで欲しいと頼みさえすればいい、ってこと？　ほんと、確かにそうね」と、おとなしいスーザン嬢は言った。そして、招待されてパッテン氏がやって来て、紅茶を飲みながら話し合ったとき、彼女は、この要請を伝えるのを引き受けるということまでやってのけた。エイミー嬢のほうは、異議を申し立てるでもなく、傍らにすわっていた。だが、そのとき彼女は、それがどのようなものであれ、知るべきことがあったなら、如何に不愉快な内容のものであっても、伝授者からそれを密かに聞き出してやろう、と自分に誓っているということが目にみえていた。既に彼女は、それが、あまりにも良くない内容ではそこには知らさないほうがよいような——とにかく、あまりにもひどすぎて他の誰にも知らすわけにはいかないような——そんな何かであってくれたら、と、そしてまた、それはパッテン氏と自分との間にとどめておくのが最もふさわしいものであってくれたら、という望みを抱いているのであった。パッテン氏は、その書類を目にすると、いくらか曖昧に、そして、決して聖職者らしくはなく、「こりゃあ、何て愉快なこった！」と叫んだ。そして、三杯ほど紅茶をご馳走になったあと、彼は、その戦利品でオーヴァコートをつくらせて帰っていった。

II

その夜の十時に、いつものように二階の踊り場で、それぞれの部屋の外で、ふたりは、おやすみをいって別れた。が、エイミー嬢は、ローソクを化粧テーブルに置くか置かないかに、異様な音を耳にしてぎょっとした。その音は、相棒の部屋から、というだけではなく、彼女の喉から出たものらしかった。うがいの音とかな切りごえの中間の音だと、それは、表現することができたであろう。「スーザンのベッドの下に誰かがいたのだわ！」と、考えるだけの余裕をかりうじて与えてくれた束の間の静寂、が過ぎると、エイミー嬢は、かたずをのんで、勇敢に、踊り場へとって返した。が、踊り場までいかないうちに、スーザン嬢がとび込んできて鉢合わせになり、彼女をとどまらせた。

第三者

「あたしの部屋に誰かが！」

ふたりは、抱き合った。「でも、誰なの？」

「男のひとよ」

「ベッドの下なの？」

「いいえ、——ただ、立ってたの」

彼女たちは抱き合ったままでいて、よろめいた。「立ってたって？ どこに？ どんな風に？」

「何と、ちょうど、部屋の真ん中——鏡台の前なの」

エイミー嬢の顔は、そのとき既に、相手の顔と同じぐらいに青ざめていた。が、その恐怖は、想像でいっそうひどくなった。

「自分の姿を見るためなの？」

「いいえ、——鏡に背を向けてたわ。あたしを見るために」

哀れなスーザン嬢の声は、やっと聞きとれるほどだった。「あたしを寄せつけないためなのよ」と、彼女は声を震わせた。「昔の——奇妙な洋服を着てるの。それで、首を片方に傾けてるのよ」

エイミー嬢は不審がった。「片方に、ですって？」

互いにしがみついて、探り合っているとき、「ひどく！」と、逃れてきた女が言明した。

これには、どういうわけか、説得力のある調子をエイミー嬢は感じとった。そういうわけで、一瞬後には、彼女は、自分自身の部屋のドアを閉めるために大急ぎで引き返すという気持ちになれたのだった。

「それじゃあ、あなたは、あたしと一緒にここにいることね」

「ええ！」と、スーザン嬢は、哀れな声で、強い同意を表わした。もしも、彼女にスラングを使いたがる傾向があったら、「もち、よ！」と叫んだだろう、という感じであった。ふたりは、その夜を一緒に過ごした。こうして、最初から、ふたつの前提がここには明示されていた。ひとつは、彼女たちは家宅侵入者と対決するつもりが自分にあっただのに、などという振りを互いにしてみせることさえもしなかったのだが、そのように、この客人と対決して

みたところで無駄なことになっただろう、という考えであり、もうひとつは、スーザンの部屋をその客人に任せておいてもこれ以上何も悪くなりはないだろう、ということである。エイミー嬢は、「しっ、黙って！」といて、耳を澄ましてドアに近づいたが、これこそ、彼女たちふたりの間の不可解な驚くべき主役交替を表わしていた——そして、将にこの行為の結果だったのである、ふたりが、即座に、この出来事の真の特性と向き合ったのは。「あっ」と、スーザン嬢は、なお声を抑えて、不吉なことを示唆するように叫んだ。「ああいう種類の者では、決して、——！」

「そのとおりよ」——相棒は、既に、彼女の言葉の穂を継ぐことができた。「ああいう種類の者では、決して、——」

「あたし達に実害を加えることのできるような者では、決してなくてよ」スーザン嬢は、漠然としていたところを、はっきり口にした。あとで証明されたように、エイミー嬢も、とても奇妙な具合に既に心の準備ができていたので、その考えは、朝にならないうちに、この上なく不思議で巧妙なやり方で、ふたりの心の中に、みごとに居すわった。年上のほうが部屋で見た人物が——そう、彼が外部からの侵入者ではない、ということは、実に明瞭なことであった。そういう種類の者とは全く別であった。エイミー嬢は、友の叫び声を耳にして友の動揺に気づいたとき、すぐにそのことを感じとったのであり、いや、それはスーザン嬢の顔を見てからすぐに、ということだったのだが。これが全てであり——そして、これこそが将にそれ。つまり、彼女たちのささやかな威厳と貫禄にとって欠けている、とふたりがそれまで感じていた何か、であったのであり、今、それが姿を現わしたのであった。まるで、前々からそれが無いことを淋しがっていたかのように、彼女たちは、その存在を知っても寛大にしていた。こんなわけで、問題のこの構成員は、彼女たちとの関係に於て第三者であり、闇の時間をさまよう存在であり、頭部を非常に——極端に——片方に傾けているという姿をしていたのである。そして、超自然界から彼女たちを眺めている、と信じてもよさそうだった。しかも、彼女たちをただ単に眺めているだけだ、と考えても大丈夫らしい。遂に、ふ

第三者

たりは、手に入れたのだ——多くの、あまりにも多くの出来事が起きてきた旧屋敷、つまり、手に触れる壁や踏みしめる床が、かすかすの秘密を漏らしたりかすかすの名前を告げることもできそうな、また、そこでは、あらゆる表面が、生死や苦悩や記憶や忘却というものをぼんやりと写す鏡になっている、そういう屋敷の中で当然手に入れることになるもの、を。そう、この屋敷は、つまり、幽——ふたりは、その言葉を声に出そうとして、止めた。そして、朝までには彼女たちがその言葉と慣れっこになってしまい——それに親しんで生活するようになったのは驚くべきことである。

彼女たちは、実に、これだけで済ますことなく、即座に理論づけまでしてみせた。それは、地下貯蔵室の中であの箱を見つけ出したこととスーザン嬢の部屋に幽霊が姿を現わしたこととの間には関連がある、というものである。ずっと永い間隠されていたものが明るみの中へ引き出されたので、過去のどんよりと淀んでいた空気が掻きまわされたのだ。書類をパッテン氏に手渡したことが作用したのだった。その朝、彼女たちは、向き合って朝食を摂りながら、この奇妙な同居人が揺り起こされたということが、遺品の秘密が侵害されたということの証拠であるにちがいない、ということについて話しあった。大丈夫よ、この秘密を守るためには、自分たちは、この男の注視にも耐えましょう、と。そして——これは彼女たちの性質で何にもまして良いところだが——この男は、彼女たちの家格につけ加えられた素晴らしいものではあるけれど、これは、ふたりだけの秘密にしておかなければならないのだから、ひとびとには、あの書簡の内容はおしえてあげてもいいけれど、彼については何ひとつ耳に入れないようにしましょう、と。ふたりは、自分たちのどちらかが彼の姿を目にするということを心配したりはしなかった——彼は、未婚の女性向きではなかったが。問題は、確かに——もし彼がこんな状態を永く続けたら——彼女たちが本当に彼と一緒に暮らしていけるということになるかどうか、ということであった。でも、彼がこんな状態をずっと続ければ、多分、自分たちは、無関心になっていくのでは、と。ふたりは、こんなことを吟味したが、それからの夜も一緒に過ごした。そして、三日目に、午後の

散歩をしていて、かなり離れたところに牧師の姿を見つけた。牧師は、ふたりの姿を認めると警告とも冗談ともどちらとも取れるように——両腕をはげしく振りながら、彼女たちと近々と向き合うために、互いの中間地点を越えたところまで彼のほうからやってきた。それは、マーの、広くて荒涼として空虚で憂鬱な広場の真ん中——或は、そういってもいいような場所——でのことであった。その広場というのは、いってみれば、群衆をあつめるのに途轍もない収容能力を発揮できる公的な場所であり、そこには、崇高な外観になるように計画された教会の、蔦に覆われた大きな聖歌隊席と未完成のままの翼廊があって、何世紀も昔にそれを築くことが放棄されてしまったということを示しているのだった。

「ねえ、あなたたち」と、パッテン氏は、ちかづいてきながら、大きな声で言った。「何はさておき、あの奇妙な古い手紙からどんなことを、私が発見してあげたか判りますか？」そこで、彼女たちが、今やひどく身構えて、待ちうけると、「あのですねえ、前世紀に、あなたたちのご先祖様のおひとりが——カスバート・フラッシュ氏とおっしゃるようですが——絞首刑にされたってことですよ。ええ、きっちりとこれだけのことでした」と告げた。

「それで、ぜひ知りたいのですが、何の咎ですか？」こう応じるだけの落ち着き——威厳さえ——を、ふたりのうちのどちらが先にとり戻したのか、あとになってから、彼女たちはおもい出せなかった。

「ああ、それこそ、わたしがまだ掴むことができていないところです。但し、丹念に調べることをお許しいただけるなら」——牧師の陽気な濃い眉が、彼女たちのひとりからもうひとりのほうへ向けられた——「わたしは、それを突きとめることができるとおもいます。あの時代の絞首刑の理由ときたら、」と、彼は、彼女たちの顔に何かを見てとったかのように、つけ加えた。「どんなに些細なことでも、その理由になり得たのですからねえ！」

「あら、些細な理由なんかであってほしくないわ！」スーザン嬢は、奇妙なくすくす笑いを漏らした。

「そうです。もちろん、普通は、こう望むでしょう。つまり、どうせやるな

第三者

ら——つまり、よくいわれるように、」バッテン氏は笑った。「子羊より親羊のほうを盗んで罰せられるほうがよい、ってね！」

「あの頃は、羊一匹のことで縛り首にしたのですか？」と、エイミー嬢が、驚いたように尋いた。

これで、彼女たちの友人は再び笑った。「問題は、彼がやったかどうかですよ！でも、見つけ出しますよ。誓って、わたし自身、ほんとうにそれを発見したいのです。わたしは、とても忙しいのですが、その結果をお知らせすると約束できるとおもっています。差し支えないのですね？」と彼は、念を押した。

「どのようなことにも耐えることができるとおもいますわ」とエイミー嬢は言った。

これを聞くと、スーザン嬢が、問いかけ訴えかけるかのように、彼女をじっと見た。「それで、この男は、結局、今日では、あかし達の何ということになるのかしら？」

エイミー嬢のほうは、相手の眼鏡を直視して、厳粛に言った。「あら、先祖というものは先祖というものよ、永久に」

「お嬢さん、それは、まさに至言です、この上なく正しいお気持ちです！」と牧師は明言した。「ご先祖が、どのようなことを為されたとしても、——」「誰も彼もが、というわけではないでしょう」とエイミー嬢は応じた。「恥じなければならぬ先祖をもつなんてことは」

「あかし達は、まだ恥ずかしいおもいはしていないのよ！」と、フラッシュ嬢が唐突に言った。

「それじゃあ、あなた達に恥をかかせるようなことはしない、とわたしに約束させて下さい。ただ、忙しいものですから」とバッテン氏は言った。「時間をください」

「ええ、でも、あかし達は本当のことが知りたいのです！」と、彼女たちは、牧師が離れていくときに、強く念をおした。ふたりは、今や、すごく興奮していたのだ。

彼は、牧師という職業にかかわる性格を疑われた、とでも受けとったように、急に立ち止まって振り向いた。「わたしが為ていることは、まさに真実——ひとえに真実のみ——では、ありませんか？」

彼が冗談好きということと同様に、この点は、彼女たちは認めた。そして、ふたりは、広場の、心地よいといえは僅かに誇張になりそうな、空間の中に取り残された。そこは、ときには、マーで生活するものの数が減って行って孤独な一匹の猫だけになってしまうということを訴えかけようとして、そのことを意識的に示そうとしているかのような様相を呈することがあった。少しあとで、彼女たちは歩きはじめたが、牧師が遙か遠くへ遠ざかるまでは口は開かなかった。しゃべりはじめれば自分たちはもう一度立ち止まるにちがないので、なおのこと、そうしたのである。それから、ふたりは、長い間見つめ合った。

「絞首刑ですって！」と、エイミー嬢が言った——だのに、まるで大得意になっているかのように。

とはいえ、これは、幽霊を実際に見たのが彼女のほうではなかったからである。

「だから、あの男の首は——」だが、スーザン嬢は口籠った。

相棒は、それを理解した。「ああ、だから、そんなにもぞっとするようねじれてたのね？」

「ぞっとする！」やっど、スーザン嬢は漏らした。二十の処刑に立ちあつたかのようないい方だった。

エイミー嬢がこれによって充分すぎるほどに想像をかきたてられなかったなんて、とにかく、考えられそうにはないことではなかつたらうか。彼女は、一瞬の間をおいてから、「あの処刑は、首を折ってしまうのね」という感想を捧げた。

スーザン嬢は、面をそむけた。「どおりで、首があんなに恐ろしくひん曲がってたのだわ、きっと。ほんとうに、とっても異様な感じだったのよ」

そのイメージがあまりにも異様なものだったので、ふたりは再び沈黙した。

第三者

「それじゃあ、むしろ、誰かをころしたっていう咎だったらいいのにねえ！」
遂に、エイミー嬢が叫ぶように言った。

相棒は考えた。「それは、誰を殺ったか、ってことによるのでは——？」
「そんなこと関係なしに、よ！」エイミー嬢は、特有の威勢のよさで応えた
——その威勢のよさに引きずられて、ふたりは再び歩きはじめた。

その週の終りになっても何の情報ももたらしてくれなかったので、明らかにパッテン氏は途方もなく多忙なのだった。そうこうしているうちに——日曜日の午後——あの出来事がそっくり繰り返されたのである。若いほうのフラッシュ嬢は、いつの日かこういう事態になるにちがいないということを確認していたのだが。彼女たちは、いつも欠かさず夕べの礼拝に出席しており、それが終るまで夕食はおあずけにしていた。そして、このときは、スーザン嬢のほうが先に用意ができて、階段の下で仲間を辛抱強く待っていた。やっと、エイミー嬢がドレスの裾のきぬずれの音を聞かせ、手袋のボタンをはめながら降りてきた。スーザン嬢が常々おもっていたとおり、彼女は際立って若く洗練されて見えた。このひとのように着こなせる者は、マーには誰ひとりとしていやしないわ、とこの親類の女性はおもっていた。そして、これは認めておかなければならないことだが、エイミー嬢もまた、スーザン嬢のこの意見に同意していた。尤も、こちらは、相棒とは異なる精神でそれを解釈していたのだが。夕闇が濃くなってきていた。けれども、つましいふたりは、いつも、灯を点ける時間を遅らせており、灰色の日暮れの中で、大広間の背凭れの高い椅子に年長の女性は、手を辛抱強く組み合わせて、腰掛けているのであった。そこで生氣のあるものといえば、開いた扉の向こうに見える客間の小さな火——いつも、それは抑えられていた——の抑えられた輝きだけである。その客間へと、エイミー嬢は、今朝の礼拝から帰ってきたあとそこに置き忘れてあった祈祷書を求めては行っていったのだった。それから間もなく、祈祷書はもたずに、彼女は相棒のところに、こうして戻ってきたのだ。彼女の身振りには、意味を伝える何かがある——それは、一瞬のうちにあまりにも多くの意味を訴えかけているようなので、すばやい暗黙の同意のう

ちに、まっすぐに屋敷の外へ出てしまうまでは、ふたりは一言もしゃべらなかつた。教会の鐘が鳴り、空虚な、誰もいない広場ごしに、教会の大きな聖歌隊席の窓窓が、かすかに赤く染まっているのが見えていた。屋敷の外の、こんな、冬の終りの、しんとした寒いたそがれの中で、彼女たちはその話題を口にした。しかし、今回は、口火をきらなければならなかつたのは、スーザン嬢のほうであつた。「あそこに彼が？」

「火の前に——火に背を向けてね」

「じゃあ、もう、納得できたのね！」と、スーザン嬢は上機嫌で叫ぶように言つた。まるで、わたしの話をこれまでは疑つていたのでしょう、といわんばかりだつた。

「ええ、納得できたわ——あなたが言つていたあの意味もね」と、エイミー嬢は深く考えこむ風だつた。

「彼の首のこと？」

「片方に傾いてるわ」と、エイミー嬢は続けた。「その所為で——」と、彼女は考えてみた。が、まだ彼のそばにいるかのように口籠つた。

「その所為で、恐ろしい姿になつてるのよ！」と、スーザン嬢が小声で言つた。「あの様子、」と彼女は、低くうめいた。「あの、こちらを見る様子つたら！」

エイミー嬢は、ちらと一瞥して、相手のこの認識に応じた。「ええ、——そうじゃなくって？」それから、彼女の目は、教会の赤く染まった窓にくぎづけになつた。「でも、あれは何かを意味してるわ」

「その意味は、神様だけがご存知なのね！」と、仲間は、憂鬱そうに溜め息をついた。それから、一瞬の間をおいて、「彼、動いたの？」と尋いた。

「いいえ——そして、あたしも動かなかつたわ」

「あら、あたしは動いたわ！」とスーザン嬢は、大あわてに慌ててあとじさりしたのをおもい出して、言明した。

「あたしは、ぐずぐずと時間稼ぎしたってことなの。待つたのよ」

「彼が消えていくのを見るために？」

第三者

エイミー嬢は、ちょっとの間、何も言わなかった。「彼は、消えたりしないわ。問題は、そこなのよ」

「ああ、じゃあ、あなたのほうが動いたのね！」と、彼女の血縁者は応じた。

エイミー嬢は、ふたたび、少しの間、黙った。「やむを得ず、よ。でも、ほんとうにどういうことになったのか、あたし、判らないの。もちろん、あなたのところへ戻ってきたわ。ただ、あたしがいいたいのは、彼の様子を完全にのみこめたってことなの。彼は若いわ」と、彼女はつけ加えた。

「でも、悪人よ！」と、スーザン嬢が言った。

「ハンサムだわ！」僅かな間をおいて、エイミー嬢はこんな意見を持ち出した。そして、彼女は、ぬけぬけとこんな風につづけて言っただけさえた。「たまらないほどに、ね」

「〈たまらないほどに〉ですって！——首が折れてて、あんなに恐ろしい見詰めかたをするのに？」

「たまらないほどに、っていうのは、まさにあの見詰めかたの所為なのよ。すばらしい目だわ。何かを意味してるのよ」エイミー・フラッシュは、じっと考えた。

彼女が断定的に言ったものだから、スーザン嬢はそれに引きずられてこんな反応を示した。「で、何を意味してるっていうの？」

彼女の友人は、キャンタベリー管区聖トーマス寺院の微光を放っている窓窓を、ふたたび見つめた。「もうあたしたちが教会へ行かなければならない時間だってことを、よ」

(つづく)

(1991. 5. 1 受理)